阿部定年譜（予審訊問調書による）

中澤　千磨夫

この年譜は阿部定事件予審訊問調書の記述のみから起こしたものである。ただし年月について作成者の判断で推定した箇所もある。また、数え年齢を付した年があるのは、調書中の定の証言に合わせるためである。

阿部定事件予審訊問調書は、戦前の旧刑事裁判制度に存在していた現在とは全く異なる予審制度により作成された。「予審とは、地方裁判所と大審院の第一審にのみあったもので、被告事件を公判に付すべきか否かを決するための必要な事項を取り調べることを目的とする。予審判事は被告の訊問および証拠の調査によって免訴または公訴棄却の処分、すなわち被告を事件から免れさせるか、あるいは公判に付するかの判定を下す。予審手続は原則として検事の予審請求によって開始され、その取調は秘密すなわち非公開である」（伊藤隆監修・百瀬孝著『事典　昭和戦前期の日本　制度と実態』一九九〇・二、吉川弘文館）。また、同書には、小田中聡樹「刑事裁判制度の改革」（『戦後改革（4）司法改革』一九七五、東京大学出版会）により、「事実上予審は検事を指揮者とする捜査機関の捜査をくりかえすものであり、予審調書は検事調書ないし検事聴取書と似たものであったという。

そして予審には検事側の事件処理の方針が影響を与えた。また公判手続ではこの予審調書が大きな役割を果たし、公判審理は予審取調べを確認するという色彩をもっていたという」とある。

つまり、予審調書は公の裁判記録で、阿部定事件の場合ももちろん世に流布すべきものではなかったのだが、公判終結後、何者かが筆写するなり撮影するなりして外に持ち出したものである。コピー機などなかった時代である。持ち出したのは間違いなく裁判所関係者である。阿部定事件を裁いた細谷啓次郎は、その著『どてら裁判』（一九五六・一〇、森脇文庫）で「彼（引用者注：細谷のこと）がその記録を見るまえに、記録を預かっていた書記はもちろん、その他の人が相当数見たとみえ、記録には手垢がついていた」とか「人間というものは、厳重にすればするほど、または見てはいけない読んではいけないと、喧（やかま）しくいえばいうほど、秘かに見たくなり読みたくなるもので、裁判所で、ひそかに、無断で記録を見たり読んだりした職員があったことは想像にまかせる」といっている。

こうして調書は『艶恨録』などの名で地下出版されたのである。私が目を通したのは活字化された次の七つである。「阿部定事件予審調書《全文一〇五枚》」（『新評』一九七〇・一〇）（A）、粟津潔・井伊多郎・穂坂久仁雄『昭和十一年の女　阿部定』（一九七六・一一、田畑書店）（B）、丸山友岐子『はじめての愛』（一九八七・二、かのう書房）（C）、伊佐千尋『愛するがゆえに』（一九八九・一〇、文藝春秋）（D）、『命削る性愛の女　阿部定〈事件調書全文〉』（一九九七・四、コスミックインターナショナル）（E）、前坂俊之編『阿部定手記』（一九九八・二、中公文庫）（F）、七北数人編『阿部定伝説』（一九九八・二、ちくま文庫）（G）。なお、記号は異同確認のため便宜上付した。

年譜中に現在では不穏当とも思われる表現が存在するが、当時使用されていた歴史的・文化的文脈に鑑み、いい換えは行わなかった。

一九〇五（明治三十八）年（満〇歳）

東京市神田区新銀町十九番地に畳職人阿部重吉（Dによる。Aは字不祥で処理。B、E、Gは金吾。Cは金吉。Fは安吉）・カツ（B、C、D、F、Gによる。Aは字不祥で処理。Eはカソ）の四女として生まれる。三男四女の末っ子。長姉は生まれてすぐ死去。

一九一三（大正二）年（満八歳）

三味線を習い始め、小学校在学中続ける。

一九一四（大正三）年（満九歳）（数え十歳）

この頃、次兄三兄死去。

この頃から、男女のことを知り、ませていた。

一九一七（大正六）年（満十二歳）

東京神田尋常小学校卒業。

卒業後一年位、裁縫の稽古に通ったり、先生を家に呼んで習字を習ったりする。

一九二一（大正八）年（満十四歳）（数え十五歳）

この頃、長兄・新太郎（A、B、C、E、Gによる。Dは徳太郎。Fは省略）離縁し、それまで外に囲っていた水商売の女を家に入れる。

家の職人を三姉・照子（A、B、C、E、Gは巽照子。Dは近藤照子。Fは省略）の婿養子にする。新太郎夫妻相続権の危機を感じ照子夫妻を苛める。母は照子に味方し家内ごたつく。両親は定に毎日外で遊んで来いという。

友人・福田ナミ子（A、B、C、D、E、F、Gとも）の家で慶応の学生・桜木健（B、C、E、F、Gによる。Aは「特に名を秘す」と記す。Dは桜井健）に姦淫され、不良となり浅草で遊び暮らすようになる。

家の金十五円ほどを持ち出し、不良仲間と遊興。それが重なり、サーチャンサーチャンと持てはやされる。六十円持ち出したこともある。

照子夫妻家出後離縁。照子は近所の職人を情夫に持つ。

不良仲間と性的関係はなかったが、夏鎌倉で遊んだ時、二十歳位の男二人と一度だけ関係。

一九二〇（大正九）年（満十五歳）（数え十六歳）

神田で不良だった土屋嘉平（B、C、Gによる。この記事は第七回訊問にあり、Aでは全文省略されている。

Dは小野正典。Eは古屋嘉平。Fは大屋良平）という十八、九歳の近所の乾物屋の息子と懇意になり、毎日その家へ行き二階で関係。

この頃、土屋の他にも本間（B、C、E、F、Gによる。Aは省略。Dは佐藤）こと国井（B、C、E、F、Gによる。Aは省略。Dは黒田）という不良とも二、三回関係。

四月、芝区聖坂の聖心女学院前の屋敷に小間使い奉公。お嬢さん付きの女中となる。

女中奉公中、無断でお嬢さんの晴着、帯、指輪を身に付け浅草金竜館に活動写真を観に行ったため警察で調べられる。

その後、家でおとなしくしている。

暮、初潮。

一九二一（大正十）年（満十六歳）（数え十七歳）

新太郎夫妻、親の金を持って家出。

両親畳屋をやめ、神田の家を売り払って、次姉・今尾トク（A、B、C、D、E、Gによる。Fは省略）の嫁入り先である埼玉県坂戸町へ家を建て定と三人で転居。

東京へ出て土屋に会ったことがある。

坂戸駅前の林家という西洋料理店の内儀が良い人を世話すると、定に新聞記者を紹介。

その男に東京へ連れて行くと騙され、川越で二、三日旅館に泊まり、見つかって帰る。

一九二一、二二（大正十、十一）年頃

また三味線の稽古を始める。

近所の男（注：前項の新聞記者と同一かどうかは不明）と懇意になり、一度位関係。時々散歩をして目につく。

一人で時々近所の洋食屋にでかけ噂になる。

それを見かねた父が怒り、そんなに男好きなら娼妓に売ってしまうといいだす。

一九二二（大正十一）年（満十七歳）（数え十八歳）

七月、父に連れられ横浜市蒔田町の遠縁にあたる稲葉正武（A、B、C、E、Gによる。Dは秋葉正義。Fは稲葉國武）の所へ行く。父、稲葉に定を娼妓にする世話を頼む。稲葉は兄・新太郎の先妻・ウメ（B、C、D、E、F、Gによる。Aはウ以下字不祥）の姉・黒川ハナ（B、C、E、Gによる。Aは字不祥。Dは白川ハナ。Fは黒田ユキ）の亭主。

年齢が足らず娼妓になれず、稲葉方に一月ばかり世話になる。

この間、稲葉に無理やり関係される。以後芸者になってからも関係を続ける。

この頃、東京で土屋に会ったことがある。

横浜市中区住吉町の芸妓屋・春新美濃に抱えられ、みやこ（A、B、C、D、E、F、Gとも）と名乗り一本の芸者になる。前借金三百円。

一九二三（大正十二）年（満十八歳）（数え十九歳）

横浜市神奈川区春木町の川茂中に住み替え。前借金六百円。

九月一日、稲葉の家に遊びに行っていた時、関東大震災に遭う。稲葉宅は全焼。

十月、稲葉の家族全員と富山市に行き、清水町の平安楼に住み替え。前借金千円以上。春子（A、B、C、D、E、F、Gとも）と名乗る。客のない時はいつも稲葉方へ行っており、関係が続く。

一九二四（大正十三）年（満十九歳）

この頃、定は稲葉方の暮らし向きを一切支えていたが、生活の苦しいのを見かね、朋輩芸妓の三味線の撥五、六個とキセル一本を盗んで入質。警察に調べられる。（第二回訊問。第一回訊問では、数え二十一歳（一九二五年）のこととされるが、こちらを採る）

十月頃、稲葉の家族と共に、芝区露月町三十一番地に借家。半年ほどふらふら遊ぶ。

一九二五（大正十四）年（満二十歳）（数え二十一歳）

大連で芸者をしていた稲葉の妻・黒川ハナの従妹が、稲葉方の世話になり、稲葉と関係する。その上で稲葉が芸者に売ったのを、黒川ハナは知って知らぬ顔をしていた。そこで定は、自分が喰いものにされていたことを悟り、縁を切ろうとするが、富山の前借が稲葉との連判でままならなかった。

五月、その始末のため、長野県飯田町の三河屋という芸妓屋に住み込む。やはり稲葉との連判で前借金は千五

百円位。静香（A、B、C、D、E、F、Gとも）と名乗る。不見転芸者で検黴もあり、花柳病に罹る。

三河屋で働いていた時、二度位ヒステリーが起きて頭が少し変になり、高い櫛や簪を折ったり見舞いに来た客に時計をぶつける。

一九二六（大正十五・昭和元）年（満二十一歳）（数え二十二歳）

一月、検黴まで受けて芸者をしているなら、いっそ娼妓になった方がましと大阪市の飛田遊郭の御園楼に住み替え。源氏名・園丸（A、B、C、D、E、F、Gとも）。父の連判だけで、前借金は二千八百円位。三河屋の前借は返し、稲葉とは縁を切る。

この時、初めて母に二、三百円小遣いをやる。

六月、半年ほど大阪の朝日席という貸し座敷で働く。

一九二七（昭和二）年（満二十二歳）（数え二十三歳）

ある会社員から落籍の話が出たが、部下も客であったため、話は流れ金をもらう。

名古屋市西区羽衣町の徳栄楼へ、前借金二千六百円で住み替え。源氏名は貞子（A、B、C、D、E、F、Gとも）。

母が会いに来る。十日位休み歓待。帰る時小遣いを八十円位やり、母や姉の子ども全部に土産物を買い与える。

名古屋で娼妓をしている時、梅毒に罹り注射を十本してもらう。

一九二八（昭和三）年（満二十三歳）（数え二十四歳）

稲葉が芸妓紹介業を始めたと手紙をよこすが、交際はしないといってやる。

稲葉の娘がわざわざ遊びに来たので、一週間位泊まらせて土産を持たせて帰す。

腸チフスに罹る。

夏頃、イボ痔で二カ月ほど入院。

一九二九（昭和四）年（満二十四歳）

商売がだんだん嫌になり、無断で大阪の紹介屋へ行く。そこから通知されてしまい、徳栄楼の使いに連れ戻される。

徳栄楼との相談で大阪の松島遊郭の都楼へ住み替え。前借金は二千円位。源氏名は東（A、B、C、D、E、F、Gとも）。

一九三〇（昭和五）年（満二十五歳）（数え二十六歳）

冬、都楼の客筋が悪く、来て半月ほどで嫌になり自由廃業しようと東京へ逃げ出す。東京で以前世話になった塚田という紹介屋の前の宿屋にいるところを、都楼の使いに見つかり連れ戻される。

無理やり丹波篠山の大正楼に住み替えさせられ、おかる（A、B、C、D、E、F、Gとも）と名乗る。

大正楼は玉の井の淫売以下で、寒い冬の晩も外で客を引く有り様でますます嫌になり、半年ほどで客を踏み台

に駆け落ちを装い逃げ出すが、失敗し、連れ戻される。
源氏名を育代（A、B、C、D、E、F、Gとも）と変える。
逃げるために、娼妓奉公中客の金百円を盗み、警察に調べられる。
看視が厳重で逃げられなかったが、ある時、表の鍵が掛かっていないのに気づき一番電車で神戸まで逃げ、それ以来、娼妓から足を洗う。
神戸で吉井信子（A、B、C、D、F、Gによる。Eは吉井伸子）と名乗って二週間ばかりカフェーの女給をする。
小遣いにも困り、月百円の収入のある商売はないかと、高等淫売を始める。

一九三二（昭和七）年（満二十七歳）（数え二十八歳）

大阪に移って、高等淫売をする。
間もなく淫売を止め、一年間ばかり妾をする。相手は三人変わり、毎月百円から五、六十円の手当をもらう。
この時から、情事に快感が湧き、一人寝が寂しくなる。
旦那の来るのが月に五、六度位なので、淫売当時の好きな客二人とも時々関係していた。
金もたやすく入り暇もあったので、遊蕩的になり、宝塚や道頓堀で遊んでいた。大阪で花札・麻雀賭博で警察に調べられ、検挙。
謹慎する気になり、小遣いも四百円あったので、妾を止め一人で大阪の住吉アパートを借り、本など読み一月

半位静かに生活。

男から遠ざかりイライラするので医者に診察してもらったところ、別に異状はない、独身より真面目な夫婦生活をするように、また精神修養の本を読み、気分転換するようにといわれる。

また遊びに出かけ、麻雀を始め、好きな男が出来た。

秋頃、大阪で横浜の知人に会い、両親が心配していることを聞き、帰りたくなる。

冬まで三月ばかり、田舎（坂戸）の両親の元に滞在。生まれて初めて親孝行をする。大阪で良い人の世話になっていると嘘をいって安心させ、両親の肩を揉んだり、新聞を読んでやったり、料理をしてやるなどしたところ、親はもう満足だから死んでも良いとまでいう。

その頃、坂戸へ篠山から三人もで探しに来たので親許に居られなくなり、大阪のアパートに帰る。

一九三三（昭和八）年（満二十八歳）（数え二十九歳）

一月、母カツ病没。享年七十五歳。麻雀に行って留守で三通も電報を貰い、うらまれたので、金だけ送る。荷物をまとめ大阪を引き払い、初七日の時に坂戸に帰り、墓参。

二週間位、滞在するが、篠山のこともあり、噂にのぼり人に顔が合わせられず、窮屈で東京へ出る。

三ノ輪で、吉井昌子（A、B、C、E、F、Gによる。Dは省略）と名乗って高等淫売をする。

十月頃、日本橋区室町の袋物商中川朝次郎（A、B、C、Gによる。Dは山川雄二郎。Eは小川夕太郎。Fは大川朝次郎）の妾になる。中川は三十七、八歳で定も好きだった。毎日来てもらう約束で、神田新銀町のおでん

屋の二階から日本橋区本石町の生け花師匠の二階に間借り。毎月六十円位もらっていた。

一九三四（昭和九）年（満二十九歳）（数え三十歳）

正月、父が病気と知らせがあり、田舎（坂戸）へ帰る。

十日間位、何も忘れて熱心に看病。本当の親孝行をしたと思っている。父は死ぬ頃、定の世話になるとは思わなかったと涙を流して喜ぶ。

一月二十六日、父重吉病没。享年七十五歳。

父の形見として三百円分けてもらい、東京へ帰り、中川の妾を続ける。

その頃、横浜で昔の友達から、稲葉の娘が死んだことを聞く。稲葉の娘とは仲良しだったので、墓参へ行く。

この時から、稲葉方とまた往来を始め、暮らしを見兼ね、指輪を入質して百五十円やる。

中川の妾をしている頃、梅毒治療に掃毒丸を飲んでいた。

九月頃、中川が病気になり、定のことを心配してくれたので、相談ずくで別れる。

半月ばかり、稲葉方でぶらぶら遊ぶ。

横浜市中区富士見町の山田という淫売屋で高等淫売を始める。

暮頃、政友会院外団の笠原喜之助（A、B、C、Gによる。Dは笠原市之助。Eは小原七之助。Fは立原喜助）の妾となる。ところが、笠原は不埒でろくな手当もせず、愛情もなく、定を獣扱いした。別れようとすると、平身低頭して哀願する品性下劣さで、すぐ嫌いになった。

一九三五（昭和十）年（満三十歳）

一月、昔馴染みの中川が恋しくなり、電話で呼び出し、浅草の上州屋で同宿。

笠原となんとか別れようと、逃げる。だが、笠原は坂戸町まで探しに来て、稲葉に妾になっていることを話すとか、世帯を持った費用を全部返せとか、殺すとかいって脅かす。

一月末、定は困りぬき、名古屋へ逃げ、笠原と縁を切る。

名古屋市東区千種町の寿という小料理屋に田中加代（B、C、D、E、F、Gによる。Aは田中和代）の偽名で女中に入る。女中は定一人で、ごく真面目な店だった。

四月末、名古屋市会議員で中京商業の校長・大宮五郎（A、B、C、D、E、Gによる。Fは小宮三郎）が、宴会の帰り、他の料理屋の女中を連れて寿へ来る。大宮の女中に対する態度が紳士的でキリッとしていたので、定は立派な人だと惚れる。

四、五日後、大宮が一人で寿へ来る。水菓子などを食べながら、定の身の上話を聞きたがった。定が哀れっぽい調子で同情を引くように、東京の生まれで亭主に死なれたので、九つになる子を育てるためにこんなことをしているとでたらめをいったところ、大宮は、子どもに何か買ってやれと十円よこす。定は、良い人だとますます惚れる。

さらに四、五日後、大宮がまた一人で和服で来る。定は、大宮が自分に気があるのに違いないと思い、子どもの話などをしながら、膝にもたれ伏し、泣いているようにする。大宮は、そんなところに手をやってはいけない、男だから変な気持ちになる、人が来るといけないから向こうへ行って座っているようにいった。定は、ここだと

思い、色っぽいようすでもたれかかると、大宮が抱きしめてきたので、そのまま関係。大宮は、将来面倒を見てやってもよいから、真面目にしていろという。

その二、三日後、大宮が、また寿に来たので、定はゆっくりしたところで会いたいという。大宮が、鶴舞公園付近の松川旅館に行こうというので、ちょっと外出すると店に断り、その旅館で関係。

その後、寿には帰らず、そのまま付近の福住という小料理屋に住み込みで働き、松川旅館で一回大宮と関係。

六月、なんとなく名古屋に飽きる。大宮には子どもが死んだ、松川旅館気付で手紙を出すといい、五十円もらって東京へ帰る。

十日ばかり、下谷に居た稲葉方に行き、ぶらぶら遊ぶ。

以前定が妾となっていた笠原が、結婚詐欺で定を告訴。稲葉方へ刑事が調べに来る。

それをうるさく感じ、以前東京で淫売をしていた時に知り合った浜町の淫売屋木村博（A、B、C、E、Gによる。Dは木村健。Fは田村博）のところへ行き、田中加代（A、B、C、D、E、F、Gとも）の偽名で高等淫売に。客席では田中きみ（A、B、C、D、E、F、Gとも）と名乗り、大宮には木村方に居るから来てくれと手紙を出す。

六月中旬頃、大宮が木村方へ訪ねて来る。木村方は姉の家だと嘘をいう。品川の夢の里で二時間位遊び、浅草で活動見物。夕食後、大宮は名古屋へ帰る。この時、三十円もらう。

木村方に滞在しているうちに、木村と関係が出来、木村の内縁の妻・金子静（A、B、C、E、Gによる。Dは静。Fは金子のぶ）が焼き餅を焼き、家内がごてごてし出す。木村の先妻・大橋秀（B、C、E、Gによる。

A、Dは秀。Fは大橋初江。B、C、E、Gは秀子とも）が仲に立って、定と木村を秀方二階に同居させてくれた。秀は、木村と同棲していた時、木村が金子と懇意になったので、それなら婿にやると夫と金子を同居させ、自分は近所に別居していた。

定、淫売を止める。

七月中旬頃、金子静が、大宮が来ていると定を迎えに来る。

早速支度をして、東京駅から汽車で熱海に行き、玉の井旅館に泊まる。大宮は、木村の内縁から定が淫売をしていることや、人の亭主を取ったことを聞いたと定にいい、それでも将来引き受けてやるから真面目になれと意見する。初め、大宮への気持は一時の浮気位のものだったし、大宮は田村正雄（B、C、D、E、F、Gによる。Aでは省略）と名乗り、本名・職業を打ち明けず、潔癖症で寝間も面白くなかったので、定は頼りなく思っていたが、この時は有り難くなり、将来は真面目になって大宮に頼ろうと決心する。

翌日、定は大宮を沼津まで送り、涙で別れ三十円もらう。

東京へ帰り、稲葉方の世話になる。近所の御祖師様にお百度参り。禁煙の願かけをする。

半月ほどして、大宮に会いたくなる。定は、大宮が胸に名古屋市会議員か市役所の役員印である丸八という徽章を付けていたことを知っていたので、八月中旬名古屋へ行く。

名古屋駅前の清駒旅館で新聞を見ると、「大宮市議渡米」の見出しで大宮の写真が出ており、この時初めて名前と職業を知る。定は早速電話をかけ、東築港の南陽館で大宮と会うが、大宮は定との関係が知れるかもしれないと打ち萎れ、十三日に東京へ行くから帰るようにいわれる。五十円もらって帰京。

八月十三日、大宮が渡米のため上京。定と大宮は夢の里で会う。

その後、定は稲葉方で世話になる。

夏、稲葉正武に頼まれ、銀座・資生堂で治淋剤を買う。

十月下旬頃、大宮が帰国することを知っていたので、定は先回りして名古屋で待っていたが、大宮は帰途東京に滞在したため二週間も待ち呆ける。この間、活動写真など見て、遊び暮らし、三百円以上も遣う。

十一月十一日、ようやく大宮に会う。大宮は忙しいと一時間で別れる。百円もらう。

十一月十六日、豊橋で大宮に会う。一日ゆっくりし、五十円もらって帰京。

間もなく大阪で大宮に会った時、身体に腫れ物が出来て困るというと、梅毒だろうから草津温泉へ湯治へ行くようにと二百五十円もらう。

十一月下旬頃から翌年一月十日頃まで、草津温泉で湯治治癒。

草津湯治中、一度大宮が来る。大宮は、定が煙草を吸わなくなったのを知り驚く。大宮は一晩泊まるものの、関係せず。

翌日、一緒に伊香保に行き泊まる。大宮は翌日昼頃帰る。百円もらう。

この時、大宮からどことなくおとなしくなり、口の利き方も変わったといわれ、定は非常にうれしかった。

草津滞在中、梅毒治療に毎日掃毒丸を飲む。

一九三六（昭和十一）年（満三十一歳）

一月、医者の診断で梅毒第三期。

一月中旬、京都で大宮に会う。

草津や京都で、大宮は定に真面目になって商売をするように諭し、暮からおでん屋のような小料理屋を始めるため、どこかに奉公して料理を習ったらどうかという。

東京へ帰り、荏原区上神明町の姉・トク（B、C、D、E、Gによる。Aはト。Fは次姉とのみ記し名は省略）方や下谷区入谷町五十一の稲葉方に滞在。

二月一日、新宿の紹介業・日の出屋に儲けは少なくてよいから真面目なところへ世話してほしいと申し込み、中野区新井町五百三十八の割烹店・吉田屋の女中となる。

主人の石田吉蔵（A、B、C、D、E、F、Gとも）を初めて見た時、様子が良い優しそうな人だと岡惚れ。

十日位経った頃から、石田は廊下ですれ違った時など、定の首を指で突いたり、立ちふさがったりした。定は自分に気があるのではとも思ったが、単なる揶揄だろうと済ませていた。

二月二十五日頃、二日ほど暇を取って稲葉方から帰った晩、定が電話室で芸妓屋に電話をかけていると、石田が用もないのに入って来て、定の耳たぶを噛み、肘で尻を突いた。定は、横目で色っぽく睨み、嬉しく思う。

翌日、朝早く定が便所に行くと、石田が女中部屋の廊下でうろうろしており、定の手を握り、抱き締める。

その後、折さえあれば抱き合ったり、キスしたり、乳をいじってもらったりしたが、まだ関係はせず。

三月三日、大宮上京。定は吉田屋から一時暇をもらい、一緒に新宿の明治屋旅館に泊まる。大宮は頭をぐりぐりに刈っており、東京に三月滞在し青年の気分で勉強するつもりで、その間は定と関係しないという。その代わ

り、勉強が済んだら塩原に連れて行くという。だが定は、一月も二月も男に接しないではとても堪らないという。大宮は、定に色男があるなら人物試験をして夫婦にしてやるといい、五十円くれる。

四月三日夕方、大宮から電話があり、吉田屋から暇をもらい二晩外泊。

四月五日、午後十一時頃、定が帰ると、石田が腕を痛くつねる。

四月六日昼、石田と二階の広間に行くと、石田は電話は旦那からだろうという。定がにやりと笑うと、石田は定を抱き締めキスする。

四月中旬頃、内儀が離れに客だというので行ってみると、石田が酒を飲んでいたので驚く。石田は外で酒を断っているので家で遊ぶといって、首から吊るした成田神社の禁酒の札を見せる。定がお酌をすると、石田は手を握ったり、抱き締めたり、前をいじったりした。定は嬉しく感じ、されるに任せていた。間もなく、八重次（A、B、C、D、E、F、Gとも）という芸者が来る。

この時、初めて石田の清元を聞き、全く惚れてしまう。芸者が帳場へ行った隙に、初めて情交。

翌日、朝早く便所に行くと石田が待っており、離れで関係。

だんだん二人の仲が露骨になる。

四月十九日、晩、石田と応接間で電気を消して、長椅子に腰掛け関係しようとしている時、女中に見つかり家人に知れる。

四月二十日、石田が、昨夜家内から痛めつけられたので、外でゆっくり相談しようと、定にいう。

四月二十二日、晩、内儀に、家に行って来たいから二日ばかり暇をもらいたいという。内儀には二十五日まで

に帰ってくれといわれていた。

四月二十三日、午前八時、新宿駅で石田と落ち合い、渋谷の待合・みつわに行く。石田を他人行儀に旦那と呼ぶと、二人だけの時旦那なんていうなといわれたので、定は参ってしまう。酒を飲み、情交してから、石田は今日は二人の結婚式だから芸者を呼ぼうという。定は月経中だったが、石田は嫌がらず、触ったりなめたりした。定は、今までの男で、石田が一番情事が濃厚で上手だと思う。

四月二十七日、夕方まで、流連。寝床は敷き放しにし、昼となく夜となく情交し、芸者を寝床にまで呼んで酒を飲み、乱痴気騒ぎをし夢中になっていた。

四月二十七日、晩、多摩川の待合・田川へ。

二十九日朝まで、寝床を敷いたまま、夜もほとんど寝ずに猥褻の限りを尽くし遊び暮らす。

四月二十八日、田川で芸者を呼ぶ。

四月二十七、八日頃、田川で定が、本当に惚れ合うと椎茸や刺身を前に付けて食べるそうだという。すると石田は、吸い物から椎茸を出し、箸で定の前に差し込み、ちゃぶ台の上に置く。しばらくして、石田がそれを半分食べ、残りを定が食べた。定が、石田を抱きながら、誰とも良いことをしないように殺してしまおうかしらというと、石田は定のためなら死んでやるという。

四月二十九日、午前七時頃、田川を出る。浅草区柳橋の芸妓屋・歌の家の芸妓・山子きん（B、Gによる。Aは山ふきん。C、D、E、Fは山子さん）を訪ね、十円借りて旅費とし、金の工面に、定は名古屋に向かう。大宮に会うためである。

名古屋駅前の旅館・清駒館から大宮に電話。その日は会えず、黒川加代（A、B、C、E、F、Gによる。Dは省略）の偽名で一泊。

四月三十日、午後一時頃、南陽館で一時間位大宮に会う。関係はなし。百円と旅費十円をもらい、五月五日に東京で会う約束をする。

午後三時の特急で帰京。汽車の中でも、石田にかじりつきたい気がしてならなかった。

午後五時頃、静岡から石田に八時東京駅に着くと電報を打つ。

午後八時半、東京駅から田川の石田に神田駅まで迎えに来て欲しいと電話。

三十分位で、石田が神田駅に着く。

午後十時半頃、円タクで、尾久町四丁目百八十八の待合・満佐喜へ行く。二度続けて関係。冗談に石田の手首を腰紐で縛ると、石田は子どものように喜ぶ。

五月一日の夜まで、食事もせず酒を飲んで関係。

五月一日、午後十時過ぎ頃、勘定二十円位を払い、満佐喜を出る。

円タクで銀座・藤屋に寄り、土産に菓子を買う。

午後十一時、田川に着く。

三日夕方まで、流連。

五月三日、午後七時頃、勘定は六日に持って来ると田川を出る。

途中新宿の蟹料理屋に寄る。

十時頃、円タクで満佐喜に行く。

五日の夕方まで、寝床を敷き放しにし、入浴もせず、情事の限りを尽くす。定が鋏で石田の陰毛を十本位切ったり、陰茎を摑んで切る真似をすると、石田は馬鹿なことをするなと喜んで笑っていた。

五月五日、昼頃、大宮と新宿の明治屋旅館で会う約束をしていたが、石田とふざけているうち夕方となる。

午後七時頃、明治屋旅館に行くと、大宮は四時間待っても来ないから夕食を摂って来たという。百二十円もらう。関係はなし。石田との流連で頬がやつれた定に、大宮はもう一度草津へ行った方がよいという。また、暮に千円やるから商売しろとも。

大宮と銀座のオリンピックで食事。十五日に東京駅で会う約束をして別れるが、定は大宮に気の毒な気がしてならなかった。

午後十時頃、満佐喜に帰り、寝ずに石田と関係。

満佐喜から稲葉の家に電話をかけると、吉田屋から稲葉に定と石田の行方を尋ねていると分かる。二人とも平気になってしまい、六日晩まで遊び暮らす。

五月六日、石田は定に二度も金策させたので、引け目に感じ、一旦帰宅することにする。

その晩はしとしと雨が降っており、二人とも泣けて恋の愁嘆場であった。定は、石田が帰宅しても内儀に遣らせまいと思い、関係し続け二度気を遣らせる。

祝儀とも七十円位の勘定を満佐喜に払い、番傘を買ってもらう。

午後十時頃、定は下駄、石田は長靴の相合傘で、満佐喜を出る。

ぶらぶら歩く。円タクを拾い浅草に行き、公園を歩く。
別れの盃を上げようと野田屋で一杯飲み、十二時の看板で追い出される。
五月七日、野田屋の後、浅草の汁粉屋・梅園でソーダ水を飲む。
ぶらぶら歩いて柳橋の方へ行き、橋のたもとの小料理屋で一杯飲む。午前二時の看板で追い出される。
あっちこっちぶらぶら歩く。
午前三時過ぎ、円タクを拾い、中野へ向かおうとすると、巡査に咎められる。
中野町新高の待合・関弥の二階で一時間位ビールを飲み、朝まで関係。石田は定に、玉寿司へ話をしておくから二、三日してから電話してくれれば都合の良い日に会うという。
午前九時頃、定は、石田に家に帰るようい置き、十円札一枚を懐中に入れてやり、関弥を出る。
自動車で白木屋へ行き、稲葉への土産を買う。
十二時頃、稲葉方へ行く。
稲葉方で空腹になったので、土産の寿司を家人と食べたり、シナ蕎麦を取ったり、茶を飲んだりしたが、石田に執着する気持ちが強くなりどうしようもなくなった。
ビール三本を一人で飲み、気を紛らせていたが、夜寝てからも石田のことばかり考えて焼き餅が焼け、煙草を吸ったり、雑誌を読んだりしていた。
石田は、定が先に帰ってしまったことが癪に障り、関弥から板橋の兎月園に遊びに行き一泊。
五月八日、前日同様石田を思い過ごす。

昼間、ラジオで清元の放送があり、余計石田を思い出す。

夜、寝つかれず、自分の襦袢を縫う。石田の妾になってもつまらないから夫婦になるより仕方ないが、それには他所へ逃げるより方法はないが、石田は逃げる人でなし、いっそ殺してしまおうとまで思いつめる。

石田は、兎月園から家に電話し、金を取り寄せ自宅に帰る。

五月九日、稲葉家が成田神社に参拝するため、定は留守番。本もろくろく読まず、石田のことばかり考える。晩もろくろく眠られず。

五月十日、稲葉家大掃除のため、近所の喫茶店でビールを飲む。

夕方、帰ると、七日に注文していた羽織が届いたので、紐を買うため浅草に出かける。

浅草・明治座で芝居を見るも身が入らず。役者を見ても石田の方が良いと石田のことばかり考えていた。その芝居に出刃包丁を使う場面があり、自分も出刃包丁を買って石田にふざけてやろうという気になる。

午後十一時頃、稲葉方へ帰宅。

稲葉の子どもに玉寿司に電話させる。すると、石田から電話番号を聞いておいてくれとのことだったので、もう一度電話すると切る。嬉しくてふるえ上がる。

早速トランクを持って稲葉方を出、新宿の明治屋旅館に行き、ビールを飲んで泊まる。

五月十一日、小遣いが不足したので、上野の小野古衣店に袷と半纏を売りに行く。だが、小僧だけだったので品物を預けて出る。活動写真を見たり、明治製菓でウィスキー入りコーヒーを飲んだりして古着屋に戻り、四円で売る。

近所の幸寿司で寿司を買い、電話を借り玉寿司に電話。明治屋旅館の電話番号を知らせる。
幸寿司の二、三軒先の菊屋金物店で、牛刀一丁を九十銭で買う。
大塚の姉・照子（A、B、C、D、E、Gによる。Fは大塚の姉さんと記す）に金を借りようとしたが、忙しくて会えぬといわれ、明治屋旅館に帰る。
午後七時半頃、石田から電話あり。石田は十四日まで待てといったが、定は是非会いたいので中野へ行くという。この時、途中で電話が切れ、もう一度石田からかかってくる。
午後八時半頃、円タクで省線中野駅へ行き石田と落ち合う。石田は、セルに兵児帯姿。定は嬉しさのあまり、自動車から転げるように降りる。定は、包みから牛刀を出し、芝居もどきで脅かす。
石田が出した二十円を受け取り、中野駅付近のおでん屋に行き、酒を三本飲む。
午後九時頃、円タクで尾久の待合・満佐喜へ行き、十八日石田を殺すまで流連。
惚れている男に百年振りに会ったような嬉しさで、泣いたりふざけたり夜通し寝なかった。牛刀を出し、切りつける真似をする。また、牛刀を石田の陰茎に付けて他の女と出来ないように切ってしまうという。
五月十二日、女中に見られるといけないと思い、牛刀を額の裏に隠す。
下谷の稲葉の妻・黒川ハナ（Eによる。B、C、Gは黒川はな。Dは白川ハナ。Fは黒田ユキ。Aは記事省略）に電話して、一昨夜、話もせず突然外出したが、十五日までに帰ると告げる。
中野の玉寿司に電話し、新宿の明治屋旅館の電話番号を聞き、明治屋に電話。昨夜勘定もせずに出たことの言い訳をする。

五月十三日、夜、芸者を一人呼んで一時間半位遊ぶ。

五月十二、三日頃、石田が咽喉を締めるのはいいといったので、定が締めてもらったところ、石田は定が可哀想だから嫌だという。次に、定が上になり、石田の咽喉を締めると、石田はくすぐったいからよせという。

五月十五日、午後五時頃、東京駅で大宮に会い、銀座の小料理屋で食事。

品川の夢の里で一時間半位休息し、お義理で関係。石田のことばかり考え、何の興味も沸かなかった。五十円もらう。

午後十一時頃、円タクで満佐喜に帰る。大宮は四谷で降りた。

五月十六日、昼頃、神田の万成館に滞在している大宮への手紙を満佐喜の女中に届けさせる。使いの者に五十円持たせてくれという内容。だが、大宮は宴会に出て不在とのことだったので、女中は手紙を置いて帰る。

夕方、石田に五円持たせ理髪にやる。

晩、石田に乗り、初めは手で喉を押すように関係。次に腰紐を首に巻き締めたり緩めたりして関係。首を強く締めると、石田の腹が出て陰茎がピクピクして気持ち良かった。そういうと、石田は、定が良ければ少し苦しくても我慢するという。

五月十七日、午前二時頃、定が首を締めると力が入り、石田はうーと一声唸り、陰茎が急に小さくなった。驚いて紐を放すと、石田の首が赤くなり紐の跡が付いた。目は少し腫れあがっていた。石田は、酷いことをしたなとはいったが、少しも怒らなかった。

朝、柳川や酢の物を取って食べ、定だけが酒を飲む。

石田は人に顔を見られるのが嫌で、下に顔を洗いに行かず、定が水を持って来てやる。

十一時頃、定だけが酒を飲み、情欲が起きたので石田の陰茎をさわり、関係。

寝て起きると午後一時頃だった。

晩方、銀座の資生堂へ行き、石田の首のことで相談。血管が腫れたのだから、静かに寝かせて流動物を摂るよりない、治るまで一、二カ月かかるといわれる。目の赤いのを治すために、目薬一瓶だけ買う。

モナミという喫茶店で夕食にチキンライスとコーヒーを摂り、土産に野菜スープと西洋菓子を買う。

資生堂に戻り、水を薬瓶に入れて飲ませれば気休めになるから、何か薬をくれというと、三粒以上飲ませてはいけないと、三十錠入りカルモチン一箱を出したので、七十銭払う。

千疋屋に立ち寄り、西瓜一個を一円十銭で買う。

午後九時頃、満佐喜に帰る。

石田は寝ていたがすぐに起きる。定が資生堂で聞いた話をすると、石田は困ったなといい、金が無いから満佐喜に長くいるわけにもいかないと悲観する。牛刀のことを忘れていたので、定は女中に包丁を借りて西瓜を切り、石田に食べさせる。また、女中にスープも温めてもらい、カルモチン三粒と一緒に飲ませる。

その後、石田はうどんかけを定はのり巻きを取って食べる。石田は、またカルモチンを五粒飲む。

夜遅く、雑炊を一人前注文して、それと一緒にさらにカルモチンを五、六粒飲ませると、石田は目をしょぼしょぼさせ始めた。

石田は定に、勘定も足りないからちょっと帰るしかないという。定は帰りたくないという。石田は、この顔で

いれば女中に見られてきまりが悪いし、定に下谷の家（稲葉家）か、さもなければどこかにいてくれというが、定はどうしても帰りたくないという。石田は、では勘定は借りておき、湯河原の知り合いのところに二、三日、二人で行ってから妻・トク（A、B、C、D、Gはオトク。E、Fはおトク）を呼んで帰ることにしようという。定がそれも嫌だというと、石田は末長く楽しむためには少し位我慢しなければいけないという。

定は、石田がいよいよ一時別れる気だなと思い、声を出して泣く。

女中が、前に注文しておいた鶏のスープを持って来たので、石田に飲ませる。

午後十二時頃、二人で布団に入る。

石田は首が腫れて元気がなかったが、定がふくれていたのを慰めるため前をなめたりして機嫌を取り、少し関係。

石田が自分は眠るが、定に顔を見ていてくれといったので、定が石田の顔に頬を擦りつけているうち、石田はうとうとする。

首を治し二人が立ち行くため一時別れねばならないと石田からいい聞かされた定は、石田の寝顔を見るうち、今度別れれば一月も二月も会えないだろうしとても我慢出来ないと思う。

心中や駆け落ちには石田は同意しないだろうから、永遠に自分のものにするためには殺すしかないと決心する。

女中の証言で、この夜出した酒は、酒四本（四合）とビール二本。

五月十八日、午前一時頃、石田はうとうとしながら時々目を開き定を見て安心していたが、自分が眠ったらまた締めるのだろう、締めるなら、途中で手を離すな、締められる時は判らないが、離すと苦しいからという。そ

の時、定は石田は自分に殺されるのを望んでいるのだろうかと、ふと思うが、すぐにそんなはずはないと思い直す。

三十分ほど、石田のかたわらで眠る。

その後、石田も寝た様子なので、右手を伸ばして枕元にあった桃色の腰紐を取りあげて、左手で紐の端を首の下に差し込み、二巻巻いて紐の両端を握り加減しながら締めた。

石田が目を開け、お加代と定に抱きつくようにしたので、定は石田の胸に顔を擦りつけ、勘弁してと泣きながら腰紐を力一杯引き締める。石田はうーんと一度唸り両手をぶるぶる震わせて、ぐったりとした。

定は震えが止まらず、テーブルの上にあった酒がたっぷり入った銚子を取りあげ、ラッパ飲みする。

石田が生き返らないように咽喉の正面に腰紐をもう一度堅く絞り、残りを首にぐるぐる巻きつけ、両端を枕の下に差し込む。

下に降りて帳場の時計を見ると、午前二時少し過ぎだった。

定は、石田を殺してしまうとすっかり安心して方の重荷が降りたような気がして気分が朗らかになった。

下に降りた時持って来たビールを一本飲み、石田に添い寝する。舌をなめて濡らしてやったり、顔を拭いてやったりした。

朝方まで、一緒に寝て石田のものをいじったり、自分の前に当てたりした。

石田を殺した以上、自分も死ななければならないと考える。

この事件で大宮も警察に調べられるに違いないので、一目会ったらお詫びしようとも思う。

石田のものに触れているうち、切って持って行こうと思いつく。額の裏に隠してあった牛刀を出し、かなり時間をかけ陰茎を切りとる。その後睾丸も切る。切りとった陰茎と睾丸はちり紙の上に置く。

血を左の人差し指につけ、着ていた長襦袢の袖と襟に塗りつけ、石田の左腿と敷布に「定吉二人キリ」と書く。さらに、石田の左腕に牛刀で「定」と刻み込む。

窓にあった金だらいで手を洗う。枕元の雑誌の包み紙に切りとった陰茎と睾丸を包む。

乱れ籠に脱いであった石田の六尺褌を腹に巻きつけ、その中に大事な包みを差し込む。石田のシャツを着、ズボン下を穿き、その上に自分の着物を着て帯を締める。形見のつもりだった。

座敷を片付け、血の付いたちり紙などは二階の便所に捨てる。この時、手洗いの蓋を便所に落とす。

牛刀を新聞紙に包んで持ち、石田に布と毛布（浴衣と半纏）を掛け、別れのキスをして、午前八時頃、下に降りる。女中に、菓子を買いに行くので石田を昼まで起こさないように頼み、自動車を呼んで満佐喜を出る。所持金は五十円位。

外出する気になったのは、十六日に出した手紙で大宮も警察に調べられると思ったので、大宮に一目会って詫びようとしたため。そう考えなければ満佐喜の二階か物干しで首を吊って死んでいたと定は思う。

新宿伊勢丹の角で自動車を降りる。新宿駅で円タクに乗り、上野の松坂屋の前で降りた。

午前九時頃、上野の小野古着屋で、着ていた白地玉結城の袷と銀鼠地ウズラ織袷羽織を十三円五十銭で売る。鼠色鱗飛模様単衣御召を五円で買い、店の次の間で着替える。小僧に頼み木綿風呂敷を買ってもらい、新聞紙包みの牛刀をその風呂敷に包んで店を出る。

松坂屋の電車通りの下駄屋へ行き、桐の駒下駄を一円四十五銭で買う。履いていた表付の下駄は店に預ける。下駄屋の世話で、隣の電話から満佐喜に電話し、女中に昼頃帰るからそれまで石田を起こさぬようにいう。はいという返事で、まだ発覚していないことが判り安堵。神田の万成館にいる大宮にも電話し、須田町の万惣果物店の前で大宮に会う約束をする。

円タクで万惣前へ行き大宮に会う。

また円タクで日本橋の木村屋喫茶店へ行く。そこで、コーヒーやトーストを取ってしばらく休む。定は大宮を見ると申し訳なく涙が出て仕方なかった。店が騒がしく失礼な手紙を差し上げて申し訳なかったとのお詫びだけしかいえなかった。

日本橋・昭和通りの蕎麦屋で、定だけ天丼を食べ、大宮に一時間位ゆっくりしてもらいたいという。

大宮はそれでは夢の里に行こうかというが、定が全然知らない旅館がいいといって、円タクで大塚の市電車庫付近の緑屋旅館に行き二時間ばかり休息。定はただ泣けて仕方なく、今後どんなことがあっても自分を金で買っただけだという気持ちでいてくれとか、心から思っているので恨まないでくれというが、大宮にその気持ちは通じなかった。大宮はその日、校長を辞めたので、今までで一番気持ち良く定に会っているという。定は大宮の気持ちを慰めるため、宿の人に布団を敷いてもらい、大宮に知られぬよう石田の褌を取り、シャツとズボン下を脱ぎ、陰茎と睾丸の紙包みを布団の下に入れ関係。大宮は定に、少し臭いという。定はお義理で関係し、大宮が入浴中に元通り支度し、勘定は大宮からもらった十円で支払った。

午後一時頃、緑屋を出、円タクを拾い新宿へ行く途中、大宮は小石川の壱岐坂で降り、定は新橋六丁目で自動

車を捨てた。

新橋中通りの古着屋・あづまやで、セルの単衣物と名古屋帯と帯揚げを十二円二十銭で買い着替え、脱いだ着物を紙包みにしてもらった。近所の下駄屋で総革草履を二円八十銭で買う。脱いだ駒下駄は紙箱に入れてもらいぶら下げて出た。

また、その近所で変装用に二円五十銭の眼鏡を買って掛ける。

午後四時頃、新橋六丁目市電停留所の寿司屋に行き、寿司を五十銭取り少し食べる。残りは包んでもらった。

ぶらぶら歩いて銀座の喫茶店・コロンバンに寄る。

そこから昭和通りまで歩き、円タクで浜町公園に行く。

一時間ばかり、定はベンチに腰掛け考え込んでいた。大阪に行って、生駒山から谷底に飛び込んで死のうと思う。浜町公園前の喫茶店で、コーヒーを飲みながら夕刊を見たが、事件の記事は載っていなかったので大丈夫だと思う。

午後十時頃、浅草の上野屋という宿屋に行く。

すぐ風呂に入ったが、大事な紙包みは風呂場に持って行った。

二階の部屋で寝たが、紙包みを拡げ、石田の陰茎と睾丸を眺めるうち、それにキスしたり自分の前に当ててみた。色々考えると泣けてきてろくろく眠れなかった。

五月十九日、**朝早く**、帳場の新聞を借りて見ると、満佐喜の事件が定の若い時の写真とともに大きく出ていた。知られては大変と、慌てて勘定を済ませ、雨だったので下駄と洋傘を借りて宿を出る。

雨で恰好がつかないから、大阪行は夜行にしようと、浅草の松竹館に行き、「お夏清十郎」の活動写真を見る。

午後二時頃、青バスで銀座に行く。食事しようと少し歩くが、恰好がわるかったので円タクで品川駅へ行く。

午後四時頃、十八時十九分発の大坂行の三等普通切符を買う。駅の売店で新聞を五部買い、汽車に乗ってから読むつもりで荷物の中に入れる。駅前の喫茶店で酒一本を飲むうち、空腹のため酔い、眠くなる。

午後五時頃、旅館・品川館に行く。

風呂に入ってからビール一本を飲み、按摩を呼ぶ。

食事をして夕刊を見ると、各駅に刑事が張り込んでいると書いてあったので、大阪行を諦める。気の毒だが品川館で死のうと決心し、切符は番頭に頼んで払い戻させる。

警察が来るので早く死にたいと思ったが、欄干が低くて首を吊っても足が届いてしまい、死ねなかった。

五月二十日、午前一時まで、捕まるのを覚悟で起きていたが、誰も来なかった。

朝、女中に頼み、一度勘定を済ませた上、首を吊り庭まで足を延ばせば死ねると考え、離れの部屋に移った。レターペーパーと万年筆を借り、大宮五郎、黒川ハナ、死んだ石田吉蔵宛てに三通の遺書を書く。

夜中に死ぬつもりで、ビールを二本飲み寝ていた。

午後四時頃、警察に捕まる。